3．暮らしぶり

3－1．暮らしぶりに関する質問

本調査では，15 歳の頃の当時の平均的な家庭と比較した回答者の家庭の暮らしぶり（問6），現在の世間一般と比べての暮らしぶり（問7），そして 15 歳の頃と現在の暮らしぶりを比較したもの（問8）をそれぞれ 9 段階の間隔尺度で聞いている。

問 6 は回答者が 15 歳の時に育った，つまり自立する前に親から与えられた経済環境に関する質問である。問 7 は回答者が自分の経済的地位を他者や社会一般と比較して感じている現在の経済的状況をたずねている。問 8 は回答者自身がもつ経済的価値観，つまり自分が育った 15 歳時と現在の生活を比較した相対的な経済的地位を聞いている。

これらの質問は，R. A. イースターリンの「相対所得」の概念に拠るものものである。われわれの経済的価値観は，親元にいたときに親の経済力によって与えられた経済的環境と，親から自立し自らが労働市場で経験した経済的環境の比較によって形成される。前者を「生活水準効果」，後者を「所得効果」と呼ぶ。「所得効果」が「生活水準効果」を上回るならば，自分が育った環境よりもよりよい生活ができると判断し，結婚や家族形成によい積極的になると考えられる。逆に下回る場合には，経済的に恵まれているとは考えず結婚を躊躇したり，追加的な家族形成を思いとどまることになる。特に，男性にとっては経済的安定は結婚の前提条件となるため，女性よりも大きな意味をもつことになる。

本調査では，問 6 が「生活水準効果」を，問 7 が「所得効果」，そして問 8 がそれらの比較を意味する「相対所得」をたずねていると仮定される。さらに，分析の段階ではイースターリンによる操作定義に沿って，「所得効果」を「生活水準効果」の数値で除した「相対所得」の代替となる数値（「イースターリンの相対所得」）も算出してみた。

これらのデータや変数は，単独で集計し考察するのみならず，他の変数と関連させ結婚や出産行動，あるいは自立に関する行動や意識，伝統的価値観や結婚観などの意識構造の分析に投入することができるものである。

3－2．独身者の暮らしぶりに関する回答

独身者の暮らしぶりに関する回答は表 3－1 に示した。全回答者では，問 6 の 15 歳の頃の生活水準の平均値が問 7 の現在の経済状況よりも高い数値を示している。それぞれの時点の経済状況を聞いた質問では過去のほうが良かったと感じていることになるが，問 8 の現在と 15

表 3－1　独身者の暮らしぶりに関する質問への回答の分布

問6	15歳の頃の家庭の暮らしぶり（生活水準効果）	平均値	5.30
		標準偏差	1.47
問7	世間一般と比べた現在の暮らしぶり（所得効果）	平均値	5.09
		標準偏差	1.58
問8	15歳の頃と比べた現在の暮らしぶり（相対所得）	平均値	5.31
		標準偏差	1.70
問7/問6 イースターリンの相対所得		平均値	1.160
		標準偏差	0.668
回答者数			514人

歳時とを比較した質問では，現在の暮らしのほうが良いという平均値を示している。問 8 は問 6 と問 7 と比較すると，若干回答のばらつき（標準偏差）が大きい。前述のイースターリンの相対所得は，平均値で 1 を上回っており 15 歳時よりも現在の経済状況のほうが良好であることを示している。

では，男女別ならびに年齢別に比較するとどうなるであろうか。表 3－2a，b は，男女それぞれ 5 歳ごとの回答を比較したものである。

表 3－2a　男女別，年齢別の暮らしぶりに関する質問への回答の分布（男子）

			年齢5歳階級						
			全年齢	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-50歳
問6	15歳の頃の家庭の暮らしぶり（生活水準効果）	平均値	5.20	5.58	5.50	5.05	5.23	4.17	4.79
		標準偏差	1.43	1.48	1.36	1.34	1.24	1.54	1.55
問7	世間一般と比べた現在の暮らしぶり（所得効果）	平均値	4.83	5.03	4.98	5.05	4.74	4.28	4.16
		標準偏差	1.52	1.65	1.54	1.32	1.50	1.41	1.64
問8	15歳の頃と比べた現在の暮らしぶり（相対所得）	平均値	5.15	5.24	5.16	5.26	5.29	4.78	4.79
		標準偏差	1.66	1.79	1.68	1.55	1.64	1.66	1.75
問7/問6	イースターリンの相対所得	平均値	0.987	0.931	0.962	1.090	0.946	1.105	0.914
		標準偏差	0.386	0.287	0.408	0.477	0.330	0.396	0.328
回答者数			215人	38	62	42	35	18	19

表 3－2b　男女別，年齢別の暮らしぶりに関する質問への回答の分布（女子）

			年齢5歳階級						
			全年齢	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-50歳
問6	15歳の頃の家庭の暮らしぶり（生活水準効果）	平均値	5.36	5.49	5.59	5.05	5.11	5.35	5.40
		標準偏差	1.48	1.48	1.51	1.38	1.48	1.62	1.43
問7	世間一般と比べた現在の暮らしぶり（所得効果）	平均値	5.27	5.12	5.36	5.38	5.21	5.29	5.15
		標準偏差	1.58	1.74	1.67	1.45	1.55	1.53	1.18
問8	15歳の頃と比べた現在の暮らしぶり（相対所得）	平均値	5.43	5.21	5.28	5.83	5.70	5.41	5.15
		標準偏差	1.74	1.75	1.75	1.81	1.80	1.50	1.35
問7/問6	イースターリンの相対所得	平均値	1.038	0.937	1.012	1.166	1.087	1.048	1.011
		標準偏差	0.434	0.246	0.423	0.642	0.383	0.396	0.314
回答者数			298人	67	90	57	47	17	20

15 歳時の暮らしぶりに関して最も高い平均値を示したのが男女とも 20-24 歳であり，次いで 25-29 歳のグループである。わが国のバブル経済が頂点を極め崩壊に転換はじめたのが 1990 年頃であり，この年齢グループの人たちが 10 歳から 15 歳ごろであった。そういう意味では，こうした歴史的背景と一致するような結果を示しているといえよう。その上の世代である 30-34 歳と 35-39 歳が 15 歳であったのは，バブル経済以前の低迷期であったために平均値が低いのかもしれない。

次に，問 7 の世間一般と比較した現在に経済環境については，男性では 35 歳以上の年齢グループで平均値が低くなっているのに対し，女性ではあまり大きな低下は見られない。また 15 歳時と現在の暮らしぶりを比較した問 8 に関しては，男性の 40 歳以上のグループで他の年齢層よりも低い数値になっている。女性は問 7 と同じように男性ほど数値の低下はみられない。

問 7 と問 6 を比較した「イースターリンの相対所得」は，問 8 とは若干異なる年齢別の変化を示している。男性では 30-34 歳と 40-44 歳のグループを除く他の年齢グループで 1

を下回っており，15 歳時よりも現在の暮らしぶりが低いと評価している。問８は直接に二時点の比較を回答者に求めたのに対し，この数値は別々の質問についての回答を比較したためにその差があらわれたのであろうか。男女を比較するとここでも同様に，女性のほうが男性よりも現状の経済的環境が 15 歳時を上回っている年齢グループが多い。

以上見てきたように，暮らしぶりに関する質問については女性のほうが男性よりも楽観的な傾向が強い。全年齢におけるそれぞれの質問の平均もすべて男性を上回っている。男性のほうが女性よりも経済的な環境の変化に敏感なのか，あるいはより影響を受けやすい労働環境に置かれているのであろうか。

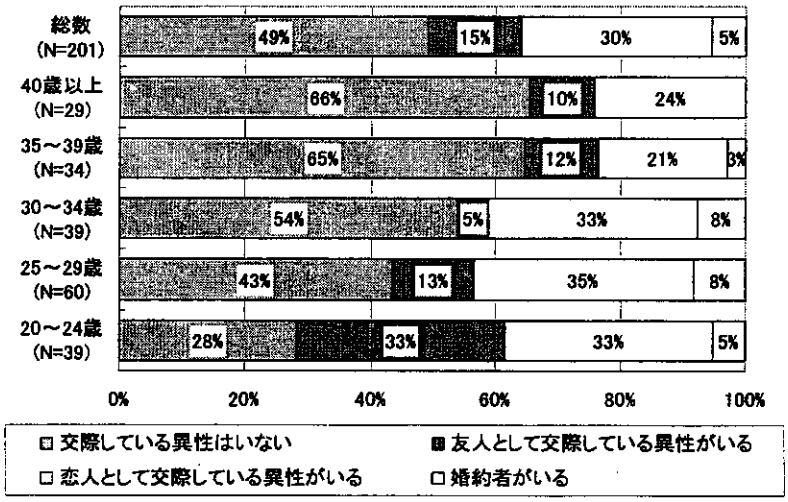
4．交際している異性の存在とパートナー探し

4－1．異性との交際状況及び交際している異性との結婚希望

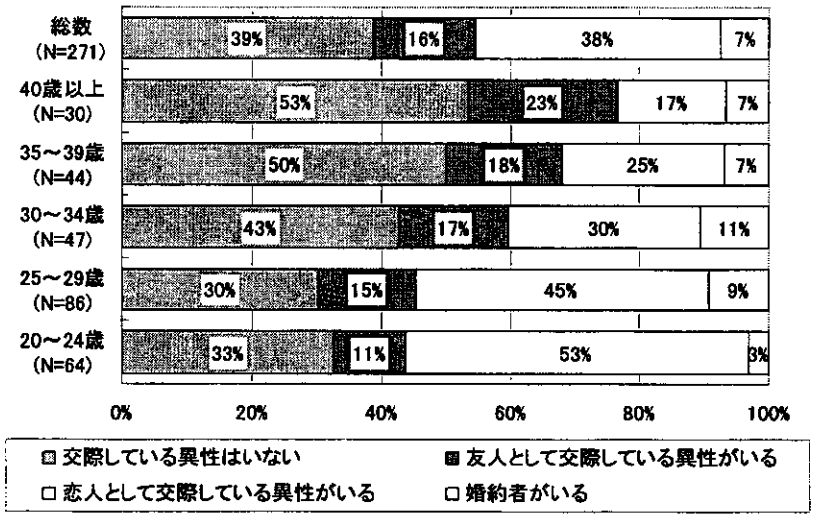
異性との交際は，将来の結婚へ結びつく可能性のある重要な行動であるが，図 4－1・2 でその状況を男女別でみると，「交際している異性はいない」と回答した者が，男性は 49.2%，女性は 38.7%を占め，交際している異性のいない割合は男性の方が 10%以上高かった。また，交際相手の内訳をみると，男女で比較的異なるのは，「恋人として交際している異性がいる」と回答した者の割合であった(男性 30.3%，女性 38.0%)。

図 4-1　未婚者の異性との交際：性・年齢階級別

男性



女性



年齢階級別でみると，男女とも年齢階級が若いほど交際している異性が存在し，逆に年齢が高くなるほど交際している異性がいないという回答が高まる傾向にある。特に男性 20～24 歳，女性 20～24 歳及び 25～29 歳はなんらかの異性との交際がある者の割合が高い。男性 20～24 歳の場合交際相手の内訳をみると，「友人として交際している異性がいる」と答えた者が他の性年齢階級と比べて目立った(33.3%)。一方，女性の 20～24 歳及び 25～29 歳は，「恋人として交際している異性がいる」と回答した者の割合が 50%前後を占めた（20~24 歳 53.1%，25~29 歳 45.3%）。

「交際している異性がいる」と答えた者に，交際相手との結婚の希望をたずねたところ，「結婚したいと思っている」と回答した者が 50.2%，「特に結婚は考えていない」と回答した者が 49.8%となった。これは，性別でみてもほとんど変わらないが，年齢階級別では，25～29 歳で「結婚したいと思っている」と回答した者の割合が 63.0%を占めた(表4－1)。

表 4－1　交際している異性との結婚希望：性・年齢階級別

(%)

	総数	結婚したいと思っている	特に結婚は考えていな
男性	100(N=91)	49.5	50.5
女性	100(N=146)	50.7	49.3
20～24歳	100(N=68)	44.1	55.9
25～29歳	100(N=81)	63.0	37.0
30～34歳	100(N=36)	50.0	50.0
35～39歳	100(N=30)	53.3	46.7
40歳以上	100(N=22)	18.2	81.8
総数	100(N=37)	50.2	49.8

4－2．結婚を意識したパートナー探し

婚約者がいる者以外(現在特定の結婚相手がいない者)に，結婚を意識してパートナーを探しているかどうかをたずねたところ，男性の 48.1%，女性の 42.2%が「はい」と回答した（表4－2)。

これを，結婚に対する考え別(問 16)に回答状況をみると，「できればすぐにでも結婚したい」と回答した者の 87.5%が結婚相手を探している。一方で，結婚したいと考えていても「いずれは結婚したい」と近日の結婚希望が無い場合は，半数以上が結婚を意識したパートナー探しを行っておらず，「はい」と回答した割合は，44.6%にとどまった(表 4－3)。このように，結婚の意志はあるが，結婚相手探しという具体的かつ重要な行動を伴わない未婚者の割合は高い。

表 4-2　結婚を意識したパートナー探し：性別

(%)

	総数	はい	いいえ
男性	100(N=187)	48.1	51.9
女性	100(N=244)	42.2	57.8

表 4-3　結婚を意識したパートナー探し:結婚に対する考え別

(%)

	総数	はい	いいえ
結婚に対する考え(問16)			
できればすぐにでも結婚したい	100(N=56)	87.5	12.5
いずれは結婚したい	100(N=316)	44.6	55.4
このまま独身でいたい	100(N=60)	6.7	93.3

5．結婚に関する考え方

5－1．結婚に関する意思

結婚の意志をもっているかどうかたずねたところ，男女とも大半は「いずれは結婚したい」と回答している（男性 74.4%・女性 71.6%）。「できればすぐにでも結婚したい」(男性 14.8%・女性 14.2%)，「このまま独身でいたい」(男性 10.8%・女性 14.2%)がこれに続く。年齢別にみてみると，女性の場合年齢が高くなるにしたがって，「このまま独身でいたい」の回答が増す(表 5－1)。年齢が高くなるに伴い，結婚に対する意思が低下するのは，次の質問からも確認された。

「現在のあなたの結婚に対する意欲の強さ」について 1(弱い)から 9(強い)までのリッカード法にもとづく尺度項目を評定してもらった（表 5－2)。その結果は，男女とも平均値は 4.9 とほぼ真中の値となった。また女性については，「現在の年齢」と「結婚に対する意欲の強さ」の間にわずかながらマイナスの相関が見られ(Pearson 相関係数 - 0.171)，年齢が高くなるほど意欲の低下傾向が若干ながら存在した。

表 5－1　結婚に関する意思

(%)

		総数	できればすぐにでも結婚したい	いずれは結婚したい	このまま独身でいたい
男性	20～24歳	100(N=39)	7.7	92.3	-
	25～29歳	100(N=61)	16.4	70.5	13.1
	30～34歳	100(N=39)	20.5	71.8	7.7
	35～39歳	100(N=34)	14.7	76.5	8.8
	40歳以上	100(N=30)	13.3	60.0	26.7
	総数	100(N=203)	14.8	74.4	10.8
女性	20～24歳	100(N=66)	13.6	83.3	3.0
	25～29歳	100(N=87)	18.4	74.7	6.9
	30～34歳	100(N=48)	8.3	70.8	20.8
	35～39歳	100(N=44)	13.6	61.4	25.0
	40歳以上	100(N=30)	13.3	53.3	33.3
	総数	100(N=275)	14.2	71.6	14.2

「将来自分が結婚できると思うかどうか」についての同様な尺度評定の結果では（表 5－3)，年齢が高くなるにしたがって，将来結婚できると思わないと評価する傾向にある。特に女性では「現在の年齢」と「将来の結婚可能性の自己評価」の間にマイナスの相関関係が強くあらわれた(Pearson 相関係数，女性：- 0.408，男性：- 0.354)。

表 5－2　現在の結婚に対する意欲の強さ

性別	年齢	総数	平均値
男性	20～24歳	100(N=39)	4.5
	25～29歳	100(N=60)	5.3
	30～34歳	100(N=38)	5.3
	35～39歳	100(N=34)	5.5
	40歳以上	100(N=30)	3.7
	総数	100(N=201	4.9
女性	20～24歳	100(N=65)	5.2
	25～29歳	100(N=86)	5.3
	30～34歳	100(N=48)	4.6
	35～39歳	100(N=44)	4.5
	40歳以上	100(N=30)	4.1
	総数	100(N=273	4.9

表 5－3　将来の結婚可能性の自己評価

性別	年齢	総数	平均値
男性	20～24歳	100(N=39)	6.5
	25～29歳	100(N=61)	6.1
	30～34歳	100(N=38)	5.8
	35～39歳	100(N=34)	5.4
	40歳以上	100(N=30)	3.8
	総数	100(N=202	5.7
女性	20～24歳	100(N=66)	6.4
	25～29歳	100(N=86)	6.2
	30～34歳	100(N=48)	5.3
	35～39歳	100(N=44)	4.3
	40歳以上	100(N=30)	3.1
	総数	100(N=274	5.5

5－2．結婚希望年齢と適齢期

結婚の意思があると答えた人に対して(問 16)，希望する結婚年齢をたずねたところ，約

半分の人が「何歳でもよい」と考えている(問 17)。結婚年齢にこだわらない割合は，年齢が高くなるにつれて大きくなる(表 5－4)。

表 5－4　希望する結婚年齢

(%)

		総数	何歳でもよい	～歳くらい(実数)
男性	20～24歳	100(N=37)	75.7	24.3
	25～29歳	100(N=53)	60.4	39.6
	30～34歳	100(N=35)	71.4	28.6
	35～39歳	100(N=31)	29.0	71.0
	40歳以上	100(N=21)	9.5	90.5
	総数	100(N=177)	54.2	45.8
女性	20～24歳	100(N=64)	75.0	25.0
	25～29歳	100(N=80)	67.5	32.5
	30～34歳	100(N=38)	34.2	65.8
	35～39歳	100(N=33)	24.2	75.8
	40歳以上	100(N=20)	15.0	85.0
	総数	100(N=235)	53.6	46.4

具体的な希望結婚年齢では，男性の方が女性よりも，約2歳ほど高い(男性31.2歳，女性29.4歳)。また，「できればすぐにでも結婚したい人」は，「いずれは結婚したい」と考えている人よりも希望する結婚年齢が若い（28.6歳と 30.6歳)。希望する結婚年齢と現在の自分の差(希望結婚までの年数)では，男女ともに年齢の高い者ほど期間が短かった。

次に「男性の結婚適齢期」「女性の結婚適齢期」があると思うか，それぞれたずねたところ，男性の適齢期・女性の適齢期ともに，男性回答者のほうが「結婚適齢期があると思う」と答えた割合が高かった。「男性の結婚適齢期がある」と回答した男性回答者の割合は，48.3%，これに対して女性回答者の割合は36.2%であった。女性回答者は年齢が高くなるに従って，「男性の結婚適齢期がある」と思う人の割合は低下する。また女性の結婚適齢期がある」と回答した男性回答者の割合は，58.3%，これに対して女性回答者の割合は50.5%であった。

5－3．収入からみた結婚条件

結婚の意思のある者に対して，「配偶者と自分の収入を合わせて，手取りで月収がどのくらいあれば結婚しても良いと思うか」たずねたところ，男性の場合，「30～40万円未満」が最も多く 34.6%，「40～50万円未満」の 26.3%がこれに続く。女性については，男性よりも高い年収を結婚条件として捉える傾向にあり，最も多かったのは，「40～50 万円未満」(28.2%)であり，これに「50～60 万円未満」(21.4%)が続く。さらに，女性の場合は，「60～70万円未満」と答えた人も 12.0%ほどいた。このように，女性のほうが男性よりも，高い月収を必要と考える傾向がある。

表 5－5　結婚してもよいと思う手取り月収

(%)

		総数	20万円未満	20～30万円未満	30～40万円未満	40～50万円未満	50～60万円未満	60～70万円未満	70万円以上	わからない
男性	20～24歳	100(N=38)	-	13.2	26.3	21.1	13.2	5.3	10.5	10.5
	25～29歳	100(N=53)	-	11.3	37.7	24.5	13.2	-	5.7	7.5
	30～34歳	100(N=36)	2.8	5.6	36.1	25.0	16.7	-	2.8	11.1
	35～39歳	100(N=31)	-	12.9	38.7	25.8	9.7	-	3.2	9.7
	40歳以上	100(N=21)	-	4.8	33.3	42.9	9.5	-	4.8	4.8
	総数	100(N=179)	0.6	10.1	34.6	26.3	12.8	1.1	5.6	8.9
女性	20～24歳	100(N=64)	-	3.1	21.9	31.3	20.3	6.3	3.1	14.1
	25～29歳	100(N=80)	-	6.3	20.0	23.8	27.5	8.8	3.8	10.0
	30～34歳	100(N=37)	-	2.7	10.8	27.0	18.9	24.3	0.0	16.2
	35～39歳	100(N=33)	-	3.0	9.1	27.3	15.2	15.2	18.2	12.1
	40歳以上	100(N=20)	-	-	5.0	40.0	15.0	15.0	5.0	20.0
	総数	100(N=234)	-	3.8	16.2	28.2	21.4	12.0	5.1	13.2

5－4．独身希望理由

結婚に対する意思がないと答えた者(問 16 で「このまま独身でいたい」と回答した者)に対して，その理由をたずねたところ，第一の理由は，男性の場合，「結婚する必要性を感じない」(50.0%)が最も多く，続いて「独身の自由や気軽さを失いたくない」(31.8%)を回答する割合が高かった。女性については，「独身の自由や気軽さを失いたくない」(46.2%)と「結婚する必要性を感じない」 (43.6%)と答えた者が多かった。

表 5－6　独身でいたい第一の理由

(%)

	総数	仕事に専念したい	独身の自由や気楽さを失いたくない	結婚する必要性を感じない	経済的に負担が大きくなる	異性と付き合いたくない	その他
男性	100(N=22)	4.5	31.8	50.0	4.5	4.5	4.5
女性	100(N=39)	2.6	46.2	43.6	－	－	7.7

5－5．父親の仕事と家庭のバランス

未婚者のイメージする理想の父親像はどのようなものであろうか。またそれは，実際に回答者が経験した自分の父親の実態と比べてどのようなものであろうか。「実際に回答者が 15 歳のころの父親が仕事と家庭のどちらを優先していたか」と「仕事と家庭のバランスと言う点でどのような父親像が望ましいと思うか」について，1(家庭優先)から 9(仕事優先)までのリッカード法にもとづく尺度項目を評定してもらった。

「回答者が 15 歳のころの父親」についての平均値は，男性 5.9 女性 6.1 とやや仕事優先によっている。これと比べると「あなた望む父親像」の平均値は男性女性それぞれ 4.9 であり仕事と家庭のバランスがよく，また「15 歳のころの父親」よりも家庭優先へ向かう結果となった。また「15 歳のころの父親」と「あなたの望む父親像」の間には，相関が認められ(Pearson 相関係数，男:0.315，女:0.319)，つまり，実際の父親が家庭優先であった場合理想の父親像も家庭優先傾向があり，仕事優先についても同様の傾向がある。

また，「あなたの望む父親像」と「現在の結婚に対する意欲の強さ(問 12)」の間には，女性のみマイナスの相関が見られ(Pearson 相関係数，男:-0.069，女:-0.206)，女性の場合は家庭優先の理想像を持っている場合結婚意欲が強い傾向があることがわかる。

表 5－7　15 歳のころの父親の仕事と家庭のバランス

	15歳のころのあなたの父親の仕事と家庭のバランス(%)									平均値
	総数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
男性	100(N=195)	1.0	2.1	5.1	7.7	29.7	14.9	23.1	10.8	5.6	5.9
女性	100(N=260)	0.8	1.5	5.8	9.2	25.8	13.5	18.8	15.0	9.6	6.1

表 5－6　あなたの望む父親の仕事と家庭のバランス

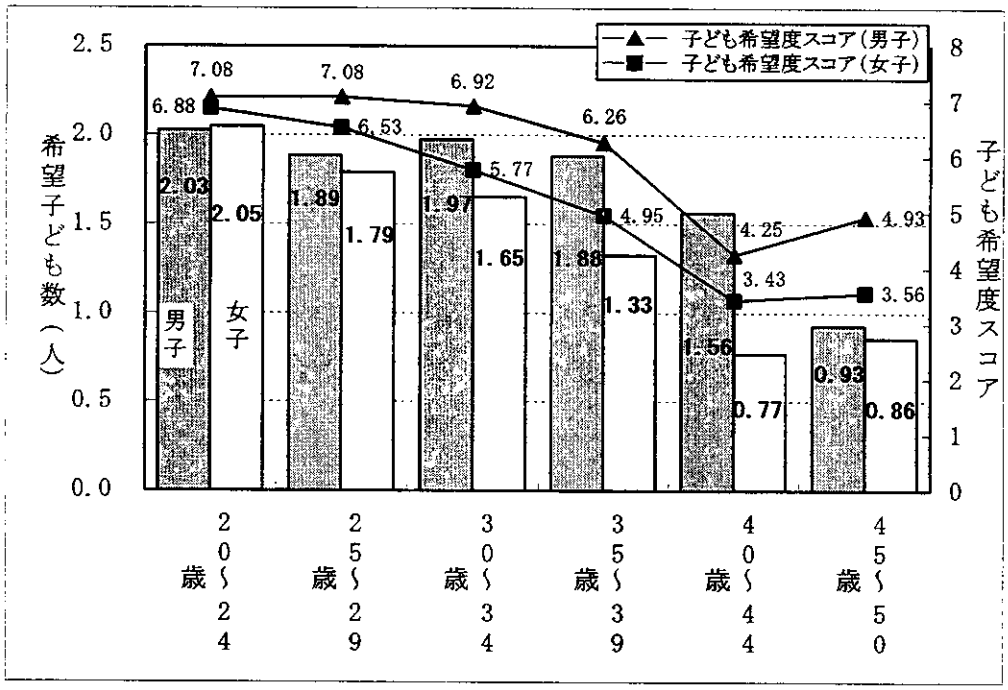
	あなたの望む父親の仕事と家庭のバランス(%)									平均値
	総数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
男性	100(N=209)	3.5	2.5	10.4	14.9	42.3	12.4	10.4	3.0	0.5	4.9
女性	100(N=272)	2.6	2.6	9.2	14.0	46.3	15.8	7.0	0.7	1.8	4.9

6．子ども

将来の子どもの持ち方について，希望子ども数と子どもを持ちたいという気持ちの度合い（子ども希望度）をたずねた。図6－1は，男女別，年齢5歳階級別に希望子ども数と子ども希望度の平均値を描いたものである。これによると，まず男女別では女子の希望子ども数，子ども希望度が男子より低い点が注目される。20～24歳時点では，まだ結婚・出産が現実のものとして考えられない人が多いためか男女差はほとんどないが，結婚・出産が身に迫った問題として考えられるようになる20代後半から30代で，女子の希望子ども数，子ども希望度の平均値がともに減少し，男子との差が大きくなっている。

※　子ども希望度：「あなたは，将来自分が子どもを持つことについてどう考えていますか」について，1「子どもは持たなくてよい」から9「子どもは必ず持ちたい」までの範囲で自分の考えにあてはまる数字を回答してもらった。

図6－1　男女別，年齢5歳階級別，平均希望子ども数と子ども希望度の平均スコア



将来の出生と関連が大きい35歳未満のサンプルについて限定して希望子ども数，子ども希望度についてみてみると，希望子ども数では男性より女性のほうが子ども0人，1人を希望する人が多い（表6－1）。おおむね，男性の方が希望子ども数は多いといえる。子ども希望度についても，子どもは持たなくてもよいとするスコア1に○をした割合は女性のほうが多かった（表6－2）。ただし，全体の平均は男性6.5，女性5.9で5を超えており，どち

らかというと子どもを持ちたいと考えている独身者が多いことがわかる。

表 6—1　男女別，希望子ども数の分布（35 歳未満の回答者のみ）

希望子ども数	割合		度数	
	男性	女性	男性	女性
0人	8.0%	10.2%	11	20
1人	10.2	14.3	14	28
2人	63.5	57.7	87	113
3人	15.3	16.8	21	33
4人	2.9	1.0	4	2
総計	100.0	100.0	137	196

表 6—2　男女別，子ども希望度の分布（35 歳未満の回答者のみ）

スコア	割合		度数	
	男性	女性	男性	女性
1	4.3%	7.5%	6	15
2	1.4	5.0	2	10
3	9.4	8.0	13	16
4	0.7	3.0	1	6
5	5.8	9.0	8	18
6	7.2	10.0	10	20
7	14.5	9.0	20	18
8	17.4	12.9	24	26
9	39.1	35.8	54	72
総計	100.0	100.0	138	201

7．未婚者の居住形態と意識

居住形態は，若者のライフスタイルや親子関係，結婚や家族に関する価値観などを規定する重要な要因とされている。本調査では，同居者や離家（親の家を離れること）時の状況など，独身男女の居住形態に関する詳細なデータを得ている。これらのデータを元に，品川区における未婚者の居住形態について明らかにし，彼らの居住形態が自立意識や結婚意欲，子どもをもつことに対する意思とどのように関わっているのかについて以下に報告する。ここでは未婚の 20 歳から 40 歳の男女を分析の対象とした。

7－1．未婚者の居住形態

表 7-1. 性別未婚者の居住形態 (%)

親との同別居	同居者の内訳	男性	女性
親と同居	両親	35.1	40.2
	うち祖父母も同居	(5.7)	(7.4)
	片親	8.0	8.6
	うち祖父母も同居	(2.9)	(1.6)
	小計	43.1	48.8
	全国平均注	62.7	74.2
親と別居	一人暮らし	50.0	43.9
	恋人・その他	6.9	7.4
	うちその他（兄弟姉妹・友人等）	(1.7)	(2.0)
	小計	56.9	51.2
合計		100	100
回答者数		n=174	n=244

注：平成7年国勢調査による20-39歳の未婚者の親子同居割合

品川区に在住する未婚男女の居住形態を表 7-1 に示した。未婚者の居住形態には，性別による大きな差はみられない。親との同居と別居がほぼ半数ずつとなっている。全国平均と比べると，男女ともに親同居者の割合が 20%ほど低いことが明らかである。品川区において親同居の割合が低いのは，進学や就職により，品川区外から転入してきた者が相当数居住していることを示唆している。

親と別居している者の多くは 1 人で暮らしている。しかし，全体の 7%弱の未婚者が恋人や友人，兄弟姉妹等と同居している。このうち恋人との同居すなわち同棲中の者が男女ともに全体の 5%程度を占めている。この値は，未婚者の同棲割合の全国平均（1.7%）[1]を上回るものとなっている。品川区のような大都市部では，結婚にとらわれないカップル形態が進行しているといえよう。

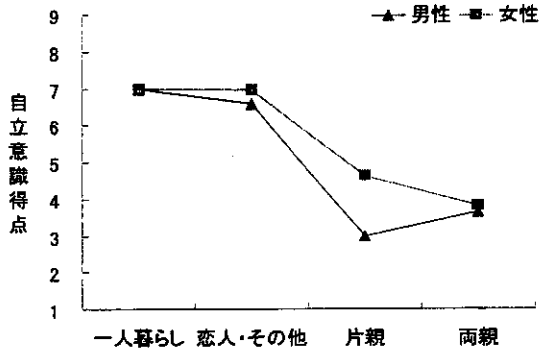
---

1) 国立社会保障・人口問題研究所が行った「第 11 回出生動向基本調査」(1997 年実施) による。

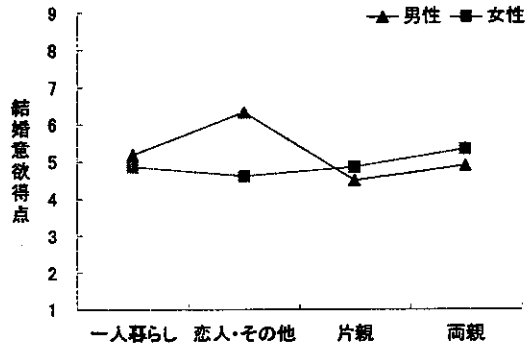
7－2．未婚者の居住形態と自立・結婚・子どもに関する意識

図 7-2. 未婚者の性別，居住形態別自立，結婚，子どもに関する意識の得点分布

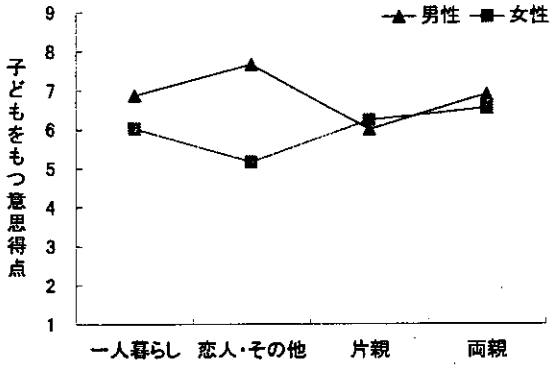
a. Q25 どの程度自立した生活を送っているか



b. Q12 現在の結婚意欲



c. Q13 将来子どもを持つ意思



未婚者の自立，結婚，子どもに関する意識の平均点を性別，居住形態別に図示したものが図 7-2 である。各項目は 9 段階尺度で回答を得ており，得点が高いほど自立しているという意識が高く，結婚意欲や子どもをもつ意思が強いことを表している。

自立意識は，居住形態によって最も大きく変動している（図 7-2 の a)。男女ともに親と別居している者のほうが，自らが自立していると考える傾向がある。未婚者の自立と居住形態が密接な繋がりをもっていることが示唆される。

次に，結婚意欲についてみてみると，恋人や友人等と同居している者において，男女間に大きな違いがみられる（図 7-2 の b)。先にも述べたように，恋人・その他との同居は，同棲と考えることができる。男性は結婚を望む者が同棲しているのに対し、女性は結婚を望まない者が同棲という居住形態を選択している。この傾向は子どもをもつ意思においてさらに顕著になっている（図 7-2 の c)。このことから，男性は結婚の前段階として同棲を選択するのに対し，女性は結婚の代替として同棲を選択しているという結果が示唆される。

その他の特徴として，①片親家庭の男性は、自立した生活を営んでいるという意識が低く、結婚意欲や将来子どもをもちたいという意欲にも乏しい傾向があること。②女性は両親と同居している者ほど，結婚や子どもをもつ意欲が高い傾向があることを挙げられる。

8．価値観

8－1．生き方や考え方について

「生き方や考え方」については，独身者票の問 15 に a から l まで 12 項目にわたって質問している。これらは過去に実施された各種調査をもとに，わが国における生き方や考え方に関する価値観をあらわすと思われる質問で構成されている。それぞれの質問に対し，「そう思う」から「そうは思わない」の 4 段階の回答を選択する。個々の質問項目についての分布は集計表（巻末資料）を参照されたい。ここでは，これらの質問に対する回答を主成分分析により価値観尺度として凝縮し，合成してみることとする。生き方や考え方については，さまざまな側面から考察しなくてはならないが，それぞれから得られる情報も多様になり解釈がむずかしくなる。主成分分析とはそれらの情報を凝縮させ，ある一定の方向性を見出そうとする因子分析の一手法である。

表 8－1　生き方や考え方に関する質問についての主成分分析結果

	主成分行列		バリマックス回転後	
	第1主成分	第2主成分	第1主成分	第2主成分
問15-a　夫は外で働き，妻は家庭を守るべきだ	0.719	−0.221	0.701	0.272
問15-b　子どもが小さいうちは，母親は育児に専念すべきだ	0.679	−0.149	0.625	0.304
問15-c　年をとった親は子どもが面倒をみるべきだ	0.512	0.310	0.210	0.560
問15-d　男女が一緒に暮らすなら結婚すべきだ	0.619	0.477	0.190	0.758
問15-e　子どもは法的に結婚した夫婦の間で生まれるべきだ	0.556	0.508	0.122	0.743
問15-h　男性も身の回りのことや家事をするべきだ	0.345	−0.338	0.480	−0.052
問15-i　一生独身でいるより，結婚したほうが良い	0.470	0.523	0.045	0.701
問15-j　夫に十分な収入がある場合，妻は仕事を待たないほうが良い	0.629	−0.381	0.729	0.091
問15-k　妻にとって，自分の仕事をもつよりも夫の仕事の手助けをする方が大切	0.698	−0.314	0.743	0.186
問15-l　母親が働くと，小学校にあがる前の子どもに良くない影響を与える	0.654	−0.223	0.652	0.230

表 8－1 は，問 15 のうち f の「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」と，g の「女性が自立するには仕事を持つことが必要である」を除いた 10 項目を投入した主成分分析結果である。なお，この 2 問は今回の分析では独身票および夫婦票のどちらにおいても他の項目とはことなる回答分布を示したため除外することとした。主成分行列の第 1 主成分はどの項目もプラスの比較的高い数値を示している。この特徴をもう少し明確にするために行った軸の回転後（バリマックス回転）の数値を見ると，第 1 主成分では d の「男女が一緒にくらすなら結婚すべきだ」と e の「子どもは法的に結婚した夫婦の間で生まれるべきだ」，そして i の「一生独身でいるより，結婚したほうが良い」が低い数値をしめし，また第 2 主成分では高い数値を示している。第 2 主成分は「伝統的結婚観」をあらわす尺度と

して，またそれらを除いた項目で高い値も示す第 1 主成分は家庭内の夫と妻の役割分担を表す項目を多く含んでいることから「伝統的性役割」を示すものと考えて良いだろう。

表 8－2 は上記の「伝統的性役割」と「伝統的結婚観」について，男女別年齢別の平均値の比較である。全年齢で見ると男性が男女の役割分担について正の値であるのに対し，女性は負を示している。また伝統的結婚観ではそれが逆転し，男性が負，女性が正である。男性は男女の役割では伝統的な考え方を持つのに対し，結婚については伝統的な価値観にはとらわれない傾向，女性はそれとは逆に性役割では革新的に，結婚には伝統的な価値観をもつようである。

では伝統的性役割観を年齢別に見てみよう。男性は 20-24 歳のグループでのみ負，その次の 25-29 歳で正の低い値である。その後年齢を加えていくに従って平均値が上昇していく。つまり夫と妻の家庭内の役割分担については，年齢があがればあがるほど保守的な考え方が強くなることを意味する。

これに対して女性は，20 歳代の前半と後半で他の年齢グループよりも弱い負の値を示しているが，30 歳代前半と 40 歳代前半ではその負の値が大きなものとなっている。男性が伝統的な考え方を持つのに対して，女性がこのように逆の考え方をもっていることが明らかとなったのは興味深い。

表 8－2　伝統的役割と伝統的結婚観に関する男女の差

	年齢	男性			女性		
		平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数
伝統的性役割	20-24歳	−0.067	0.786	39	−0.085	0.981	65
	25-29歳	0.155	1.109	61	−0.044	0.934	91
	30-34歳	0.213	0.951	42	−0.366	0.933	57
	35-39歳	0.312	0.974	34	−0.109	1.021	46
	40-44歳	0.354	1.287	18	−0.308	1.000	16
	45-50歳	0.781	0.946	17	−0.228	0.887	20
	全年齢	0.218	1.018	211	−0.152	0.959	295
伝統的結婚観	20-24歳	0.004	0.981	39	0.205	0.857	65
	25-29歳	0.034	1.017	61	0.094	0.930	91
	30-34歳	0.037	1.038	42	−0.271	1.058	57
	35-39歳	0.196	0.978	34	−0.162	1.000	46
	40-44歳	−0.450	1.248	18	−0.008	1.148	16
	45-50歳	−0.287	0.880	17	0.324	0.818	20
	全年齢	−0.012	1.023	211	0.018	0.969	295

伝統的結婚観については，男女とも 20 歳代では正の傾向を示している。男女が一緒に暮らすなら結婚すべきであるし，婚外子は好ましくなく，一生ひとりでいるより結婚したほうが良いという考えをもっていることとなる。しかしながら，30 歳代になるとその考え方は一変する。女性は負の値，つまり伝統的結婚観と決別するのと反対に，男性はますます伝統的になっていくのである。さすがに 40 歳代になると独身男性も伝統的結婚観にこだわらなくなる。

2000年の国勢調査によると，30歳代前半の女性の26.6%が男性の42.9%が未婚である。また，30歳代後半でも女性が13.8%，男性の25.7%が未婚である。わが国の少子化のもっとも大きな要因は，20代後半から30代後半の男女が結婚をせず再生産活動に移行しないことである。今回の調査からも明らかなように，男女の間には夫と妻の役割分担についての考え方や価値観，そして結婚観についての男女差が存在している。男性は伝統的な妻として母としての役割を担ってくれる女性を求め，年齢が上昇すればするほどその傾向が強くなる。しかしながら女性は伝統的な役割分担ではなく，夫との新しい時代の関係を求めているのである。結婚については，女性は堅実な関係を望み，男性はそれにはとらわれない考え方をもっている。このような相違が存在し，さらに男女間の意識の乖離がすすめば，晩婚化や非婚化を食い止めることは不可能となろう。

10. 品川区

独身者が品川区をどのように評価しているかについて，品川区の満足度に対する回答から探る。

表 10－1 は居住期間別にみた品川区に対する満足度を示したものであり，また図 10－1 はその平均満足度を計算したものである（総回答数 474）。表 10－1 から，有配偶者票による結果と比べて高い満足度を示す回答が多く，居住期間合計では，満足度 5 以上と回答した割合は 89.9%に達しており，満足度の平均は 6.6 であった（有配偶者（妻）では 5.8）。図 10－1 から居住期間が長くなるにつれ満足度が高くなる傾向が見られる。居住期間が 1 年以内の者では満足度が 5.71 であるのに対し，21 年以上居住している者は 6.92 と大きく上昇している。

表10-1 品川区：居住期間別満足度

満足度→

居住期間↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1年以内	3.2%	3.2%	3.2%	12.9%	25.8%	9.7%	29.0%	6.5%	6.5%	100.0%
1～2年	1.8%	1.8%	3.6%	5.5%	14.5%	9.1%	40.0%	12.7%	10.9%	100.0%
3～5年	2.3%	0.0%	4.5%	5.7%	14.8%	21.6%	30.7%	12.5%	8.0%	100.0%
6～10年	3.6%	0.0%	1.8%	0.0%	7.1%	21.4%	41.1%	16.1%	8.9%	100.0%
11～20年	0.0%	0.0%	1.3%	6.6%	13.2%	17.1%	21.1%	30.3%	10.5%	100.0%
21年以上	1.2%	1.2%	4.2%	1.8%	14.9%	6.5%	25.0%	27.4%	17.9%	100.0%
合計	1.7%	0.8%	3.4%	4.2%	14.3%	13.3%	29.3%	20.7%	12.2%	100.0%

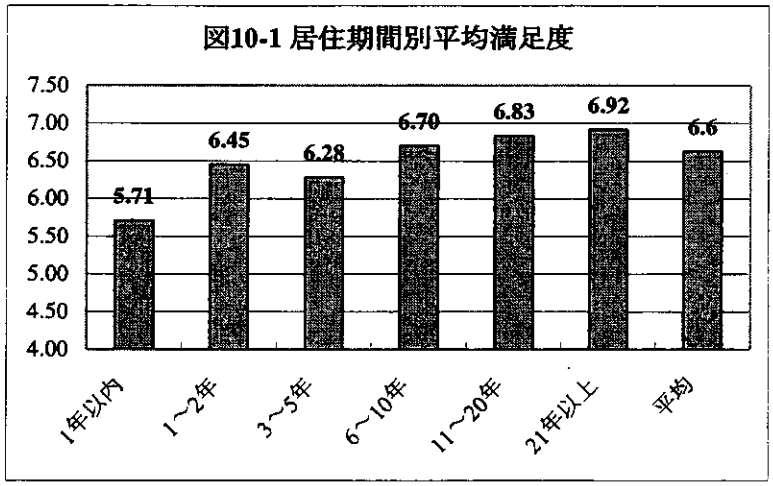


表 10－2 は男女別・年齢 5 歳階級別にみた品川区の満足度である。年齢計の結果をみると，満足度 5 以上を回答した者の割合は，男性では 86.6%，女性では 92.3%にのぼった。図 10－

表10-2 品川区：年齢別満足度

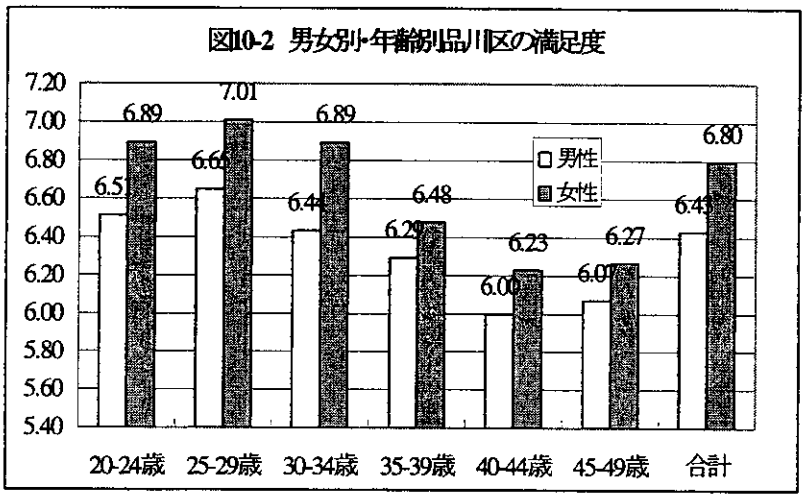
男性　満足度→

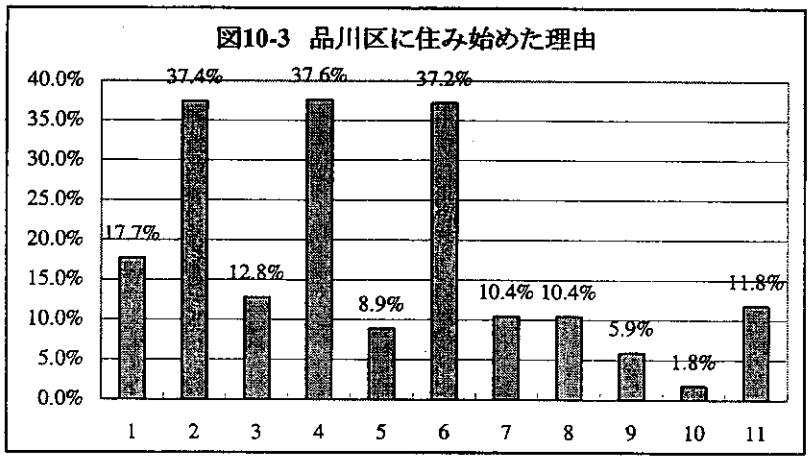
年齢別↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
20-24歳	5.1%	2.6%	5.1%	2.6%	2.6%	12.8%	35.9%	25.6%	7.7%	100.0%
25-29歳	3.3%	1.7%	3.3%	1.7%	15.0%	11.7%	26.7%	20.0%	16.7%	100.0%
30-34歳	2.6%	0.0%	5.1%	5.1%	7.7%	23.1%	30.8%	17.9%	7.7%	100.0%
35-39歳	2.9%	0.0%	5.9%	8.8%	20.6%	5.9%	29.4%	8.8%	17.6%	100.0%
40-44歳	6.3%	0.0%	18.8%	0.0%	12.5%	6.3%	25.0%	18.8%	12.5%	100.0%
45-49歳	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	42.9%	21.4%	21.4%	14.3%	0.0%	100.0%
合計	3.5%	1.0%	5.4%	3.5%	13.9%	13.4%	29.2%	18.3%	11.9%	100.0%

女性　満足度→

年齢別↓	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
20-24歳	0.0%	0.0%	3.1%	4.6%	10.8%	10.8%	35.4%	23.1%	12.3%	100.0%
25-29歳	0.0%	1.1%	2.3%	4.6%	10.3%	10.3%	27.6%	26.4%	17.2%	100.0%
30-34歳	0.0%	0.0%	0.0%	4.3%	12.8%	21.3%	25.5%	23.4%	12.8%	100.0%
35-39歳	0.0%	0.0%	2.3%	6.8%	20.5%	13.6%	29.5%	22.7%	4.5%	100.0%
40-44歳	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	30.8%	7.7%	30.8%	15.4%	7.7%	100.0%
45-49歳	0.0%	0.0%	6.7%	6.7%	26.7%	13.3%	26.7%	0.0%	20.0%	100.0%
合計	0.0%	0.7%	2.2%	4.8%	14.4%	12.9%	29.5%	22.5%	12.9%	100.0%

2 は平均満足度を計算した結果である。男性の平均は 6.43，女性の平均は 6.80 と，女性の方が高い満足度を示していることがわかる。年齢別にみると，男女とも若年層ほど高い満足度を示しており，とりわけ 25～29 歳女性の満足度は 7.01 であった。なお，有配偶者票の結果（妻）の平均満足度は 5.8 であった。





注：表の番号は問41の質問内容に対応している。
総回答数520のうち、無回答12を除いた508が分母である。

アンケートの問 41 では住み始めた理由を聞いているが，図 10－3 は各設問肢に回答した割合をグラフに表したものである。回答が多かったのは 4.（親が近くに住んでいる），2.（仕事や通学に都合がいい），6.（交通の便がいい）などで，それぞれ 37％を超える者が品川区に住みはじめた理由として挙げている。

少子化に関する区民調査

結婚されている方(女性)用

※この調査では、法的な婚姻関係および事実上の結婚（内縁を含む）を結婚としております。

平成１４年１２月
(調査実施)　品川区企画部
(調査研究)　少子化研究会
(研究助成)　厚生労働省

※少子化研究会は国立社会保障・人口問題研究所を中心とした厚生労働省の研究プロジェクトです。

＊＊＊　調査ご協力のお願い　＊＊＊

少子化の進行は、社会経済全般にわたって大きな影響を及ぼすと予測されており、品川区においても、少子化の動向をふまえた区政運営が、これまで以上に重要になってきております。

今回の調査は、区民の皆様が、仕事、家族、結婚、出産・子育てといったことに対して、どのような意識をお持ちになっているかをおうかがいするために実施するものです。区民の皆様の率直なお考えをお聞かせいただき、それらのご意見を少子化に関する政策立案の基礎資料にさせていただきます。

調査をお願いする皆様は、区内在住の20歳から49歳の結婚されている女性の中から、2000名の方を無作為に選ばせていただきました。

なお、プライベートなことをおうかがいする場合もございますが、この調査は無記名で行なわれ、また、回答はすべて統計的に処理されるため、個人が特定されることはありません。また、この調査票に記入した事項は、統計以外の目的に使用したり、他人にもらしたりすることは絶対にありません。本調査の主旨をご理解いただき、ご回答くださいますようお願い申し上げます。

平成14年12月　品川区企画部

＜アンケート調査のご記入にあたって＞

① ボールペンまたは鉛筆で記入してください。

② このアンケートは、夫婦のうち女性(宛名のご本人)にご記入いただきます。なお、一部、配偶者(夫)のお考えについてご記入いただくところもございますので、よろしくお願いします。

② 質問番号順にお答えください。矢印(→)では指示にしたがって進んでください。

誠に勝手ながら、平成14年12月20日(金)までに、返信用封筒に切手を貼らずにご投かんくださいますようお願い申し上げます。(封筒にお名前を書く必要もございません。)

問合せ先：品川区企画部企画財政課企画担当
電話：０３(５７４２)６６０７（直通）

問１　**あなたと夫の出生年月**を記入してください。

あなた	夫
昭和____年____月	昭和____年____月

問２　あなたが、（１）**現在の結婚生活（同居）を開始したのはいつ**ですか。その年月を記入してください。また、（２）現在の結婚が初婚か再婚かについても、あてはまる番号に○をつけてください。

(1)結婚生活を開始した年月
〔１．昭和　２．平成　３．西暦〕 _____年_____月

→

(2)初再婚の別	
あなた	夫
１．初婚　２．再婚	１．初婚　２．再婚

問３　**あなた**の**学校卒業後（中退後）最初についた仕事**と**現在の仕事**についておたずねします。各時期におけるあなたの(1)従業上の地位、(2)職業、(3)従業員数について、選択肢からあてはまるものを選び、太枠内の番号に１つずつ○をつけてください。

対象時期↓	(1)従業上の地位 1. 企業・団体の役員 2. 民間の正社員 3. 官公庁の正職員 4. パート・アルバイト・派遣 5. 自営業主・家族従業者 6. その他 7. 無職（学生を含む）・家事	(2)職　業 1. 専門的・技術的職業 2. 事務・販売・サービス・保安職業 3. 農林漁業作業者 4. 現場労働（運輸・製造・建設・その他） 5. その他	(3)従業員数 (本社・支社・工場のすべてを含む) 1. 1～9 人 2. 10～29 人 3. 30～99 人 4. 100～499 人 5. 500 人以上
a．卒業(中退)後の初職	1　2　3　4　5　6　7	1　2　3　4　5	1　2　3　4　5
b．現　在	1　2　3　4　5　6　7	1　2　3　4　5	1　2　3　4　5

問４　**あなたの夫**の**学校卒業後（中退後）最初についた仕事**と**結婚を決めた時の仕事**、及び**現在の仕事**についておたずねします。各時期における**あなたの夫**の(1)従業上の地位、(2)職業、(3)従業員数について選択肢からあてはまるものを選び、太枠内の番号に１つずつ○をつけてください。

対象時期↓	(1)従業上の地位 1. 企業・団体の役員 2. 民間の正社員 3. 官公庁の正職員 4. パート・アルバイト・派遣 5. 自営業主・家族従業者 6. その他 7. 無職（学生を含む）・家事	(2)職　業 1. 専門的・技術的職業 2. 事務・販売・サービス・保安職業 3. 農林漁業作業者 4. 現場労働（運輸・製造・建設・その他） 5. その他	(3)従業員数 (本社・支社・工場のすべてを含む) 1. 1～9 人 2. 10～29 人 3. 30～99 人 4. 100～499 人 5. 500 人以上
a．卒業(中退)後の初職	1　2　3　4　5　6　7	1　2　3　4　5	1　2　3　4　5
b．あなたと結婚した時	1　2　3　4　5　6　7	1　2　3　4　5	1　2　3　4　5
c．現　在	1　2　3　4　5　6　7	1　2　3　4　5	1　2　3　4　5

問５　**あなたと夫**が、**学校卒業後（中退後）に初めて仕事についた**のはいつですか。いままで仕事についたことのない方は記入しないで結構です。

あなた	夫
［１．昭和　２．平成　３．西暦］ ＿＿＿年＿＿＿月	［１．昭和　２．平成　３．西暦］ ＿＿＿年＿＿＿月

問６　**あなた**の**結婚・出産前後の時期における仕事**についておたずねします。各時期におけるあなたの(1)主な従業上の地位、(2)職業、(3)従業員数ついて、選択肢からあてはまるものを選び、太枠内の番号に１つずつ○をつけてください。

対象時期↓	(1)主な従業上の地位 1. 企業・団体の役員 2. 民間の正社員 3. 官公庁の正職員 4. パート・アルバイト・派遣 5. 自営業主・家族従業者 6. その他 7. 無職（学生を含む）・家事	(2)職　業 1. 専門的・技術的職業 2. 事務・販売・サービス・保安職業 3. 農林漁業作業者 4. 現場労働（運輸・製造・建設・その他） 5. その他	(3)従業員数 （本社・支社・工場のすべてを含む） 1. 1～9人 2. 10～29人 3. 30～99人 4. 100～499人 5. 500人以上
a. 結婚前の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
b. 結婚後の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
【以下は、出産を経験した方のみお答えください。】			
c. 第１子出産前の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
d. 第１子出産後の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
e. 第２子出産前の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
f. 第２子出産後の一年間	1 2 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

問７　**結婚前後・第１子出産前後・第２子出産前後のいずれかでお仕事を辞めた方**におたずねします。各時期において、**お仕事を辞めた理由**は何ですか。選択肢からあてはまる番号を２つまで選び、重要な順に回答欄に記入してください。なお、「７．その他」を選ぶ場合はカッコ内に具体的な内容を記入してください。

【右の回答欄に番号を記入】
1．家事・育児をしっかりやりたかったから
2．夫の収入だけで暮らせるから
3．健康上の理由で
4．職場の都合や慣習で
5．夫が望んだから
6．転居することになったから
7．その他（　　）

回答欄	第１	第２
a．結　婚　前　後		
b．第１子出産前後		
c．第２子出産前後		